別冊

クェゼリンとロイ、ナムル戦記

マーシャル方面遺族会編

訳本刊行にあたって

昭和五十三年九月一日午後零時三十六分、コンチネンタル航空機はマーシャル諸島のクェゼリン空港にその車輪を着けました。

肉親の散華した場所を自分の眼で確めたい、今なお異国の孤島に眠る御霊をお慰めしたいという切実な願いを胸に、遺族三十五名は万感を秘めてタラップを降りました。

基地司令官の入域許可、定期便の出発時刻三十分繰下げ、空港から墓地への送迎バスの供与等々の特別なお取計いに加え、軍、官、民挙げての御厚意によって、感激の墓参が叶えられたのです。

スコールに洗われた緑の芝生の中の慰霊碑には既に色とりどりの花がいっぱい飾られておりました。

この日、クェゼリン在住の大里様から一冊の記録書を贈られました。米国人ロバート・オブライエン氏が米側資料に基づいて書かれたクェゼリン、ルオットの生々しい戦いの記録であります。両島は何れも玉砕の島ですから、日本側の資料は何一つ残っておりません。私は、墓参団の一員で語学に堪能な三ツ木正次氏に翻訳をお願いしました。法律事務所を主宰して御繁忙のことを承知の上で強ってお願いしたのであります。

又、第六根拠地隊参謀として、同島守備の計画をされた木ノ下 甫氏（本会篤志会員・福井市在住）に、同氏の記録に基いての注釈を煩しました。オブライエン氏は「この冊子はアメリカ側から見た一つの戦史で、公的なものではない。また確定的とは言えない」と言っておられますが、遺族にとってはある程度当時の情況を推察するには充分と思われます。

訳本刊行をお許し下さったオブライエン氏、翻訳下さった三ツ木正次氏、注釈を煩わした木ノ下 甫氏に厚く御礼を申上げます。

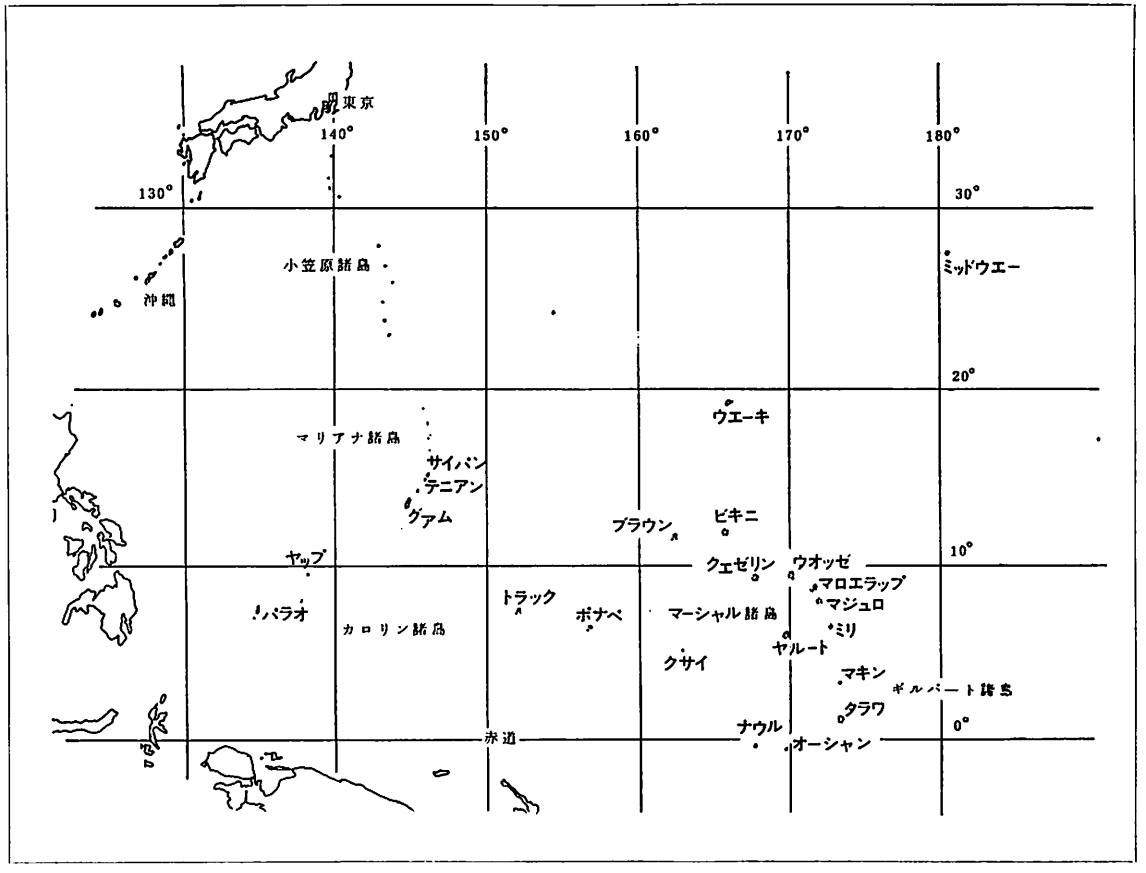
尚、文中の「ロイ、ナムル島」の日本の呼び名は「ルオット、ニムル島」であります。

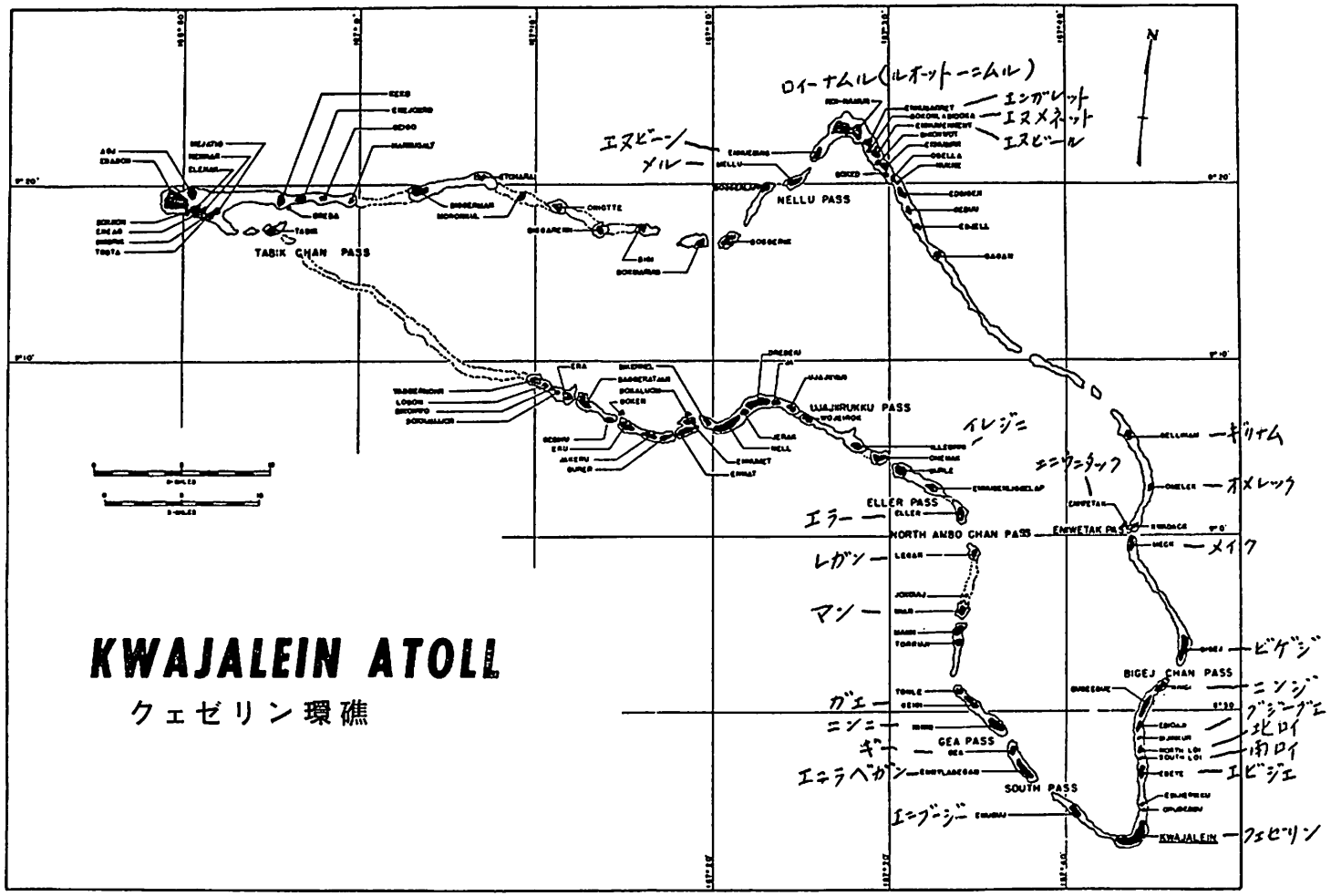
この小冊子が、現地に眠る八千柱の英霊のお慰めになれば望外の幸せであります。（合掌）

昭和五十六年八月十五日

マーシャル方面遺族会
会長　浮田信家

日本から マーシャル諸島まで





フリントロック作戦の対象はクェゼリンであった。環礁は90余の小島から成り、約1,000平方マイルに及ぶ世界最大の礁湖を擁している。

クェゼリンとロイ、ナムル戦記

ロバート・オブライエン
（会　員）三ツ木正次・訳

クェゼリン島の戦い（一つの戦史）

一九四一年パールハーバーが襲撃され、その後フィリッピン失陥を頂点として、アメリカは相次いで敗退の憂目を見て来たが、ガダルカナルとミッドウェイでの重要な戦いを転機として、太平洋での日本のあくなき進出は阻止されるに至った。

その後のアメリカの戦略は、二またの攻撃を必要とした。マッカーサー大将の率いる南部攻撃ルートは、ソロモン群島、ニューギニア、フィリッピンを経て進出するであろうが、中部及び北部太平洋における日本の支配を打破し、かつアメリカの南方への補給路を日本に断たせないために、第二のルートが必要であった。

一九四三年五月一一日ワシントンで開かれた米英参謀会議（暗号名「トライデント」）において統合参謀本部は、マーシャル諸島への進攻を決定した。一九四三年一一月ギルバート諸島のマキン、タラワを攻撃したのも、実はこの「フリントロック」作戦と呼ばれる日本領土への初の攻撃に向けた準備に他ならなかった。マキン、タラワの両環礁は、高い犠牲を払ったにもせよ、確保せられ、時を移さず、クェゼリン、ウオッゼ、ヤルート等のマーシャル諸島基地空襲の足場として使用された。

マーシャル諸島に対する攻撃は、中部太平洋を貫く一本槍を突き出すことであった。大議論の末、アメリカの戦略家は、日本本土の死命を制する攻撃の道は、マッカーサーの南部攻撃ルートではなく、中部太平洋攻撃にあるとの結論に達した。

戦略―太平洋跳び石の島

マーシャル諸島についてのニミッツ大将の計画は、防禦のないマジュロは泊地もあるのでまずこれを占領し、次いでロイ、ナムル及びクェゼリンを占領し、その後できるだけ速やかにエニウエタックを占領する旨定めていた。ニミッツ幕僚の数多くの反対にも拘らず、その他の環礁は、かりに飛行場を有していても、中性化され、「蛙跳び」され、「梢の先で枯れる」ままにされようというのであった。この計画は大胆極まるものではあったが、アメリカの空母艦隊と新たに手中に収めたギルバートを陸上基地とする航空機とは、上陸に先きだって、マーシャル諸島における日本の航空兵力を排除できようとのニミッツの確信は正しかったのである。

また、日本艦隊がトラック島の基地から出撃し敢えて一戦を挑んで来ようとも、今ではこれを迎え撃つに足りる戦艦と重巡洋艦とを保有するに至っていた。

日本の戦略家は、マーシャル諸島はいずれは持ちこたえられまいとは考えていたが、集結した戦史上最強の攻撃部隊に立ち向かいその攻勢を「遅らせる」ために駐屯部隊は増強されていた。

「フリントロック」作戦計画

ギルバート諸島がアメリカの手に落ちたあと、日本は、マーシャル諸島が攻撃されようとは予期していたものの、ニミッツ大将が想像していたとおり、一連の島々の防衛の弱点、クェゼリン島がよもや攻撃されようとは思いも寄らなかった。

また、同地の日本軍もアメリカ艦隊が未曽有の強力な攻撃を仕掛けて来ようとは予測できなかった。ホランド・スミス海軍少将（吠える気違い野郎）の麾下にある第七師団はコーレット陸軍少将に率いられ、クェゼリン環礁南部を攻撃することとなっていた。「砂時計師団」とも呼ばれるこの第七師団は、補強部隊を加えて、二二、〇〇〇

の人員と九、〇〇〇の予備兵力とを有していた。一方、環礁北部は、シュミット陸軍少将が率いる第四海兵師団が攻撃することとなっていた。

これらクェゼリン上陸部隊を支援するものとしては、約二〇〇の艦船があった。第五二機動部隊は、ターナー少将に率いられ、クェゼリン、エビジェ両島に全砲火を集中し、第五三機動部隊は、コノリー少将に率いられ、ロイ、ナムル島を同じように攻撃することになっていた。

さらに、高速空母、戦艦、軽・重巡洋艦、駆逐艦を含む数十隻の軍艦を擁した他の機動部隊は、陸上基地よりの爆撃機、戦闘機を擁する一四個の飛行中隊とともに、半ダースの小さい島々に同時に圧力を加えるため全力を結集していた。

上陸部隊は、リチャードソン大将（当地の劇場は最終的には同大将の名が冠せられた）の指揮のもと、ハワイで訓練され、オアフ島、マウイ島で上陸の予行演習を積んだ。第七師団はアッツ島での戦闘を経験していたが、第四海兵師団は未経験で、また陸、海兵ともジャングルでの戦闘のための準備を必要としていた。

タラワ、マキンでの戦訓もまた検討の要があった。

上陸に先きだって、海空からの爆撃を大幅に増やす必要があった。さらにクェゼリン島やロイ、ナムル島の近くの島々をまず占領し、上陸の前、中、後を通じ陸上の砲撃基地として使用されることとなっていた。海岸における機械水雷その他の障害物の有無を確めるために史上始めて潜水兵も使われることとなっていた。改良された上陸用舟艇も投入され、空中からの偵察もよりよい成果を収め、戦車と歩兵部隊との間の通信連絡も改善がはかられてきた。

同様に艦船、上陸、空軍部隊との間の連携の緊密化も絶対に必要であった。このことは、クェゼリンにおいては統合総司令艦の導入により達成された。それは上陸を通じ連携と統率のための中心点としてこれまでの戦艦の役を果たすものであった。「フリントロック」作戦の旗艦は、クェゼリン島ではターナー少将の座乗する「ロッキー・マウント」、ロイ島ではコノリー少将の座乗する「アラパシアン」、マジュロ島ではヒル少将の座乗する「キアンブリア」（改造攻撃空母）であった。

最後に、誰もが、とりわけ戦闘部隊の人達は、タラワのレッドビーチでの大殺戮戦だけは二度と味わいたくなかった。タラワでは、上陸作戦中広汎に予備的砲爆撃を加えたにも拘らず、ベチオ島に据えられた五、六の日本軍の機銃が、海岸に何とかたどり着こうとする海兵隊に直接銃火を浴びせたのであった。ヒル少将が後日述べたように、「それは五つか六つ。余りにも多かった。」のである。

ハワイからクェゼリンまでの一週間の航海の間、陸、海将兵はクェゼリンがその過程において第二のベチオ島になるのではないかと危惧していた。その間提督達は、クェゼリン海岸のいかなる抵抗もこれを弱めるばかりか殲滅させようと深く心に期していた。

クェゼリンの日本人

日本は一九一四年一〇月以来クェゼリンを支配して来た。それは海軍が同環礁その他のミクロネシアの島々を占領し、ドイツからこれらの諸島を奪って以来である。

クェゼリンは、アメリカに対する緒戦において、目ざましい役割を果たした。その礁湖こそ、かつてパールハーバーを襲撃した潜水艦、さらにはウェーキ島を攻撃した機動部隊の泊地でもあった。一九四四年初頭第六根拠地隊司令部が設置され、トラック島の連合艦隊の本拠地に属していた。秋山門造少将がクェゼリンの司令官であった。

クェゼリン島は、マーシャル諸島にある全基地の神経中枢であり、ここを通じて海上輸送、補給、増強が他の環礁に流れて行った。また、クェゼリン島自体にも通信隊、偵察隊、気象隊があり、エビジェ島の水上基地には航空隊、ロイ島には陸上航空基地と潜水艦基地とがあった。

一九四四年当時、環礁には約八、〇〇〇の日本人がおり、南・北部ほぼ相半ばしていた。しかし、これらのうちには、クェゼリン島の未完成の爆撃機用仮設飛行場に働く数百の朝鮮人労務者がおり、また管理事務に携わる二〇〇人以上の一般市民がいた。通常の軍部隊のうちでも実戦経験のある者は殆んどいなかった。ウオッゼに移動する予定であった一部隊はクェゼリン島から出られなくなり、上陸が開始されたとき同島で捕捉された。

クェゼリン島から離れた諸島の配備勢力はより乏しく、さびた鉄塔が今でも立っているギー島及びビゲシ島には見張台があった。

タワラと比較すると、クェゼリンの防備は弱体で、日本軍は攻撃を受けようとは思い到らず、既設の防禦施設も主として大洋側からの上陸に向けられていた。

しかしそれとて決して組みし易い相手ではなかった。約四〇のトーチカ、無数の壕舎、防空壕、塹壕が全島にくまなく散在し、コンクリートの防護壁が大洋側を走り、南端と西端とを包んでいた。

ギーその他の水道を通じて礁湖に入る深い進入路には機雷（注一）の敷設はなく、これを防備する努力が払われなかったことは明らかで、これは意外のことであった。このことが進攻部隊の何十という艦船が潜水艦による攻撃の危険にさらされることもなく直接礁湖に

侵入し、近距離からの援護射撃ができる結果を生んだのであった。

（注一）ギー水道にもその他の主要水道にも触発機雷が敷設されていた。但し陸上から爆発させる管制機雷はなかった。水路は特定されていた。

米軍は掃海艇で機雷を掃海した後、礁湖内に上陸部隊を侵入させたのである。

準備的攻撃

クェゼリンに対して始めて攻撃をかけたのは、一九四四年の上陸より遙かに前のことであった。一九四二年二月始め、パールハーバーの僅か三ヵ月後に、ハルゼー大将の率いる高速空母艦隊がクェゼリンを急襲し、九個の航空魚雷を発射し（注二）、二月一日の日の出前、「エンタープライズ」が三七機のドーントレス急降下爆撃機を発進させた。ロイ島においては日本の戦闘機隊にかなりの損害を加え、クェゼリン島においては輸送船一隻が沈没し、他の船舶七隻が損害を蒙った。

（注二）クェゼリンの六根司令部が先づ急降下爆撃機で奇襲爆撃され、司令官八代祐吉少将は即死した。その後在泊艦船に攻撃機が魚雷攻撃を行ったが、一本も命中しなかった。

艦船の沈没は一隻もなかった。

数隻の潜水艦が在泊したが、皆海底に沈座し被害皆無であった。

一九四三年の後期には、陸上を基地とするB24がナノメヤを発進し、両三度、長距離爆撃を加えた。第一次攻撃では、八機のうち一機のみがロイ島にたどりつき破砕爆弾を投下したに止まったが、第二次攻撃においては、六トンの爆弾が多くの島に投下され、また貴重な偵察写真が撮られた。

日本軍は、アメリカのマキン、タラワ進攻の際に受けたこの初期の屈辱を晴らすべく、アメリカ艦隊が、はかどらない進撃を支援するため、マキン沖に待機中、ロイ島を基地とする約一〇機が、一九四三年の感謝祭の夜、ターナー少将の機動部隊に華々しい夜襲をかけたが不成功に終った。

一二月から一月にかけ、クェゼリン等の環礁は反復攻撃にさらされていた。一二月五日の朝バウナル少将の空母艦隊は、環礁に向け延べ二四六機を発進させた。ロイ島では日本の邀撃機一九機が撃墜され、中型爆撃機四機（うち一機は離陸中に）が損壊した。しかし、多くの飛行機はカムフラージュされ損壊を免れた。また、軽巡洋艦二隻と貨物船一隻が被弾した。

クェゼリン環礁内には三〇隻の船舶―その殆んどは荷揚を終えた商船―が停泊していたが、七隻が沈没し他の数隻が損壊した。エビジェ島にあった二機の飛行艇は、ロイ島を発進、南下して来た日本戦闘機が、米軍機を退散させる前に破壊された。この空襲及びその後の空襲で沈没した船舶は、一九六〇年代になって水中呼吸装置のファン達が本格的に沈没船探しをしていた際「再発見」された。

もう一つの空母による大空襲は、一九四四年一月二九日、上陸の直前に行なわれた。「エセックス」「インドレピット」及び「キャボット」を発進した艦載機がロイ島を攻撃した。そこには同日の朝には九二機が地上にあったが、午前八時には、全環礁の空を制したアメリカ軍に立ち向えるものただの一機すらなかった。「カウペンス」「モンターレー」「バンカーヒル」を発進した艦載機は、クェゼリン島の飛行場と海軍本部地区に爆撃を加え、終日、同島を継続的に爆撃し、地上掃射を加えた。ギルバート島を発進したB24もこれに加わり、その日一日に一八トンの爆弾を投下し、さらに同日夜二〇トンの爆弾がクェゼリン島に注がれた。

明けて一月三〇日（Dデーの一日前）クェゼリンに向けて延べ四〇〇機が出撃し、午前、午後の四時間にわたり艦砲射撃が島々に集中された。

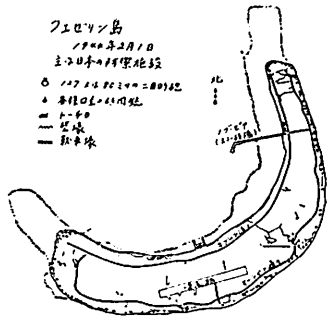
その夜輸送船団に待機していた攻撃部隊からクェゼリンの諸島にあかりが見えたが、それは前日の爆撃の際に起きた火災が猛威を振るっているのであった。

西礁脈への最初の上陸敢行予定日であるDデーの夜明けが近づくにつれて、環礁は空襲のためすっかり弱まっていた。クェゼリン島ばかりでなく、その近辺のいずれの日本軍基地においても、制空への抵抗は排除されていた。日本のクェゼリン島守備隊は困惑の極に達し、その防禦施設はすでに大損害を蒙り、最も悪いことに、同島は全く孤立してしまっていた。しかも最大規模の上陸援護爆撃は、まだまだこれから始まるのであった。

Dデー――西礁脈

第一七連隊の将兵が輸送船を後にし、カーター（ギーまたはキーヨ）、セシル（ニンニまたはニーニー）両島――クェゼリン礁内への重要な水道を扼する二つの島――を占領するためゴムボートに分乗したとき、一九四四年一月三一日月曜日の朝はまだ夜明け前であった。

その夜、上天に月はなく、大洋の波は高く、強風が吹きまいていて、そのため夜陰の中で一寸した混乱が生じた。水道の北にあたるニンニ島上陸の



使命を帯びた隊は、午前五時四五分、誤って、シャウンセイ（ガエ）島に上陸した。誤ったとはいえ、その時刻と場所こそ、戦前の大日本帝国の一部であった島へのアメリカ軍の初の戦闘上陸となったのである。皮肉なことに、ガエ島は、ニンニ、ギー、カーロス、カールソンの四島に比して、もっと強力な防備態勢を布いていることが判った。これらの島々はその日のうちに占領を予定していた西礁脈の四つの島である。

ガエ島の深い下ばえの中にいたアメリカ軍に約一〇〇人の日本人が不意をついて襲いかかった。その約半数はすぐに倒されたが、ここで斬られたGI二人はクェゼリン進攻におけるアメリカ側の最初の戦死者となったのである。ニンニ島確保こそその使命であったので、ガエ島のアメリカ軍は交戦を中止し、見張りを残して、ゴムボートでニンニ島に向け礁脈伝いに東南に下ったが、同島は無人であることが判った。

（二日後の二月二日に他のアメリカの部隊がガエ島に大洋側から上陸し、同島を掃討中さらに一一五人の日本人が銃、砲撃戦で戦死し、同島は確保された。更に重要なことは、ガエ島の浜に引き上げられていた曳船の中から海図数葉その他の情報が発見されたことで、これらはその後の進攻作戦をたてるうえで重要な役割を果たした。）

その間午前六時二〇分、他の上陸部隊がギー島の西南部に取り付き見張台に向け北上した。見張台には、ただ一人の日本見張兵が居たが斬り殺された。それから再び南に向けて掃討し、次いで二〇人の日本軍との白兵戦を演じこれを鎮圧した。かくて水道を扼する二つの島は確保され、ギー水道の掃海が行なわれた。

Dデーにおける重要な二つの対象は、カーロス（エニラベガン）、カールソン（エニブージ）両島で、これらは午前九時アメリカ軍の二個大隊が大洋側から攻撃した。カーロス島の防備は手薄で、すぐ補給、修理、弾薬貯蔵のセンターとなった。カールソン島は無線塔と通信施設を備えていたが（注三）、クェゼリン島の日本軍守備隊からのいくつかの砲火を含めて僅かの抵抗を受けたにすぎなかった。

（注三）これは第六通信隊のことで、警備兵力は僅少であった。

カールソン島からはやがて第七連隊の砲火が火を吹いた。一〇五ミリ曲射砲四大隊、一五五ミリ曲射砲一大隊が上陸し、同日中にそこに展開し、日没前に早くもクェゼリン島砲撃を開始した。

一月三一日の西礁脈作戦の間、クェゼリン島には一刻の猶予も与えられなかった。空母による空襲と艦砲射撃が終日同島に万遍なく加えられ、同島の日本軍守備隊は終夜カールソン島からのむらのない砲火にも直面することとなった。

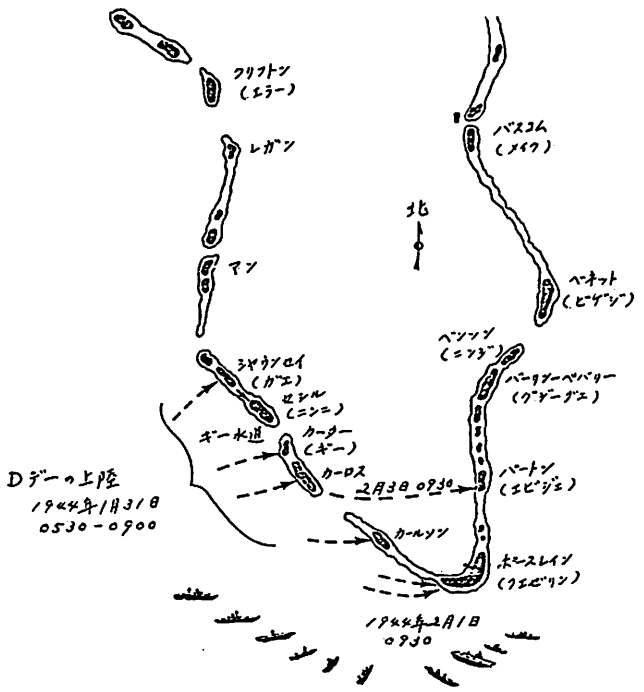
同日これより先、予定どおりアメリカの艦船がギー水道を通過し礁内に初の進入を開始していた。午前一〇時次いで午後四時戦艦「ペンシルバニア」「ミシシッピー」の援護射撃のもと、ゴムボートに乗った潜水兵がクェゼリン礁湖への進入路を探索し、海中の機雷その他の障害物の有無を確めた結果、何の障害物もないことが判り、波浪も環礁の状態も申し分ないものと思われた。

今や翌二月一日午前九時三〇分に予定されていたDプラスワン（クェゼリン島それ自体への上陸）への万端の準備は完了した。

H時――第七師団海岸に取り付く

二月一日午前七時一二分朝日が昇り、スコールとたれ込めた雲―それは間もなく上がったが―をついて予定どおりクェゼリン島への最後の予備的砲撃が開始された。それは、その量といい、効果といい、太平洋地域においてこれまでにないものであった。

日の出とともに間髪を入れず、戦艦「ミシシッピー」はクェゼリン島の西



Dデー：本図は1月31日第七師団のクェゼリン西礁脈初上陸ならびにその後のクェゼリン島及びエビジェ島への進攻を描いたものである。第四海兵師団はロイ、ナムール島を攻撃した。

端より一、五〇〇ヤード以内に移動し、上陸地点にある見える限りの目標めがけて繰りかえし片舷斉射を加えた。午前七時四五分には他艦も同距離から組織的な砲撃を開始した。これらの軍艦は、戦艦「ペンシルバニア」「ニューメキシコ」、巡洋艦「ミネアポリス」「ニューオルレアンス」「サンフランシスコ」及び八隻の駆逐艦などであった。次いで駆逐艦「リングゴールド」「シグスビー」が礁内に入り、同じく砲撃を開始した。これらとて、まだ、ほんの序の口に過ぎなかった。

この時点で、海からは七、〇〇〇の砲弾、空からは二九、〇〇〇の爆弾、一五個の一、〇〇〇ポンドと二、〇〇〇ポンドの爆弾がクェゼリン島に雨あられと降り注いでいた。さらに「エンタプライズ」「ヨークタウン」「ベローウッド」など六隻の空母より四四機が発進し、クェゼリン島を間断なく機銃掃射し爆撃した。

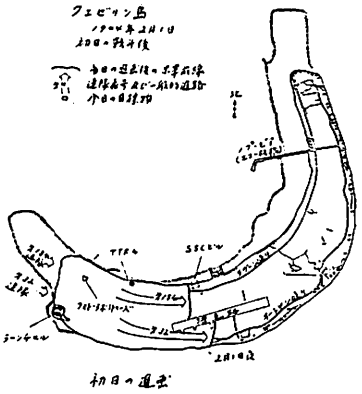
その結果は正に破壊的であった。凡ねオリムパス通りに沿うレッドビーチの内側の地域は、廃墟と化し、上陸直前には一秒間に二発の砲弾がこの地域でさく裂した。コンクリートの防護壁は吹き飛び、ココやしの木は薙ぎ倒れ、地表は大きな弾痕であばた状となった。

上陸用舟艇の第一陣が島の西端に取り付く正二分前の午前九時二八分、海岸への砲撃は止んだ。突撃陣の出発線は、カールソン島真西の大洋側に置かれた。上陸部隊からは進めば三〇分のところ、なんの事故もなく五、〇〇〇ヤード前進し、予定どおり正午前九時三〇分に上陸した。

上陸部隊は若干の軽機関銃、僅かな小銃の銃火を浴びた。その大部分は、レッドビーチの向側の半壊の掩蔽壕（そのいくつかは疑もなくラーンチ・ヒル近くに今も残っているコンクリートの掩蔽壕）からのものであったが、上陸中の犠牲者は皆無であった。砲撃は、ほぼ一〇〇％の効果をあげ、上陸自体は、タラワに比べ順調で抵抗を受けなかった。

ある従軍記者は、クェゼリン島（現名、ポースレイン）をバナナにたとえ、第七師団はその中心に割って入り、慎重に皮をむかなければならないと述べた。この表現は概ね十分であるが、作戦は決してそう容易ではなかった。当初の計画では、島の西端に上陸したうえは急進撃し、二月一日夜には、戦線のくさびを打ち込むことになっていた。翌日には、アリューシャン諸島のキスカ無血上陸等の経験をもつ第一八四連隊は島の礁側に沿い、エコー桟橋まで進み、その間アッツ島歴戦の第三二連隊は大洋側に沿い現在クロスローズが建っている第六番街とオーシャン通りの交叉点まで進撃することとなっていた。第三二連隊は次いで展開し島の先端、現在バンカーヒルが建っているところに位置していた砲座まで進撃することとなっていた。攻撃隊を先導し支援するものとしては第七六七戦車大隊からの六〇輛の軽、中量戦車があった。

この計画は、日本人を別としては、誰にも極めて合理的なものと思えた。しかし日本人の確固たる抵抗はもっとこれを計算に入れておいて然るべきだったのである。結局において、クェゼリン島の一端から他端まで皮をはぐのに、二日ではなく四日を要し、戦闘は北部攻撃部隊がロイ、ナムル島を完全に占領したずっと後まで終わらなかったのである。



二月一日――昼は易く夜は難し

上陸を果すや、第一八四連隊、第三二連隊ともクェゼリン島内部に向け急進撃した。島の西端は、現在のケントロン・フォト・ラボラトリーズに位置する営舎に宿営の日本軍が配置についていた六個のトーチカによって防備されていた。これらは僅かな犠牲を払っただけで鎮圧され、海岸線の前線は予定どおり午前一〇時三〇分オリンパス通りに沿って整えられた。

進撃は大した抵抗も受けず、夜の帳りの下りる頃まで進み、ここで対峙線が引かれた。夜の対峙線は、現在SSCビルが建っている礁側の地点から仮設滑走路に延び、滑走路の背後を廻って、次いでホルムベーグ・フェアウェイの西端にあたる点から大洋側に向けて再びカーブを描いて延びていた。上陸及び当初の進撃の間のアメリカ側の犠牲者は戦死一七、戦傷三六で、日本人は五〇〇人が戦死し、一一人が捕虜となった。

夜の帳りが下りて間もなく、クェゼリン島の北端にあってなおも活動していた敵の大砲が上陸地点の海岸に砲弾を発射し続けた。礁内にあった駆逐艦「シグスビー」が飛行場を横切って照明灯を照射したとき、エコー桟橋上現在のマリナ・ガードシャックに位置していた日本の対空高射砲が攻撃を加えて来たが、同艦は直ちにこれを沈黙させた。

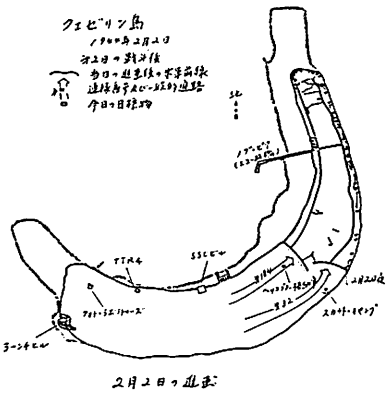
日本の歩兵部隊は、すぐにアメリカの対峙線に浸透し始め、そのあるものは成功を収め、上陸海岸線にあわや到

達しようとするまで阻止されなかった。

一つの攻撃は、殆んど対峙線を押し開くところであった。将兵が強風と大雨に水びたしとなったあと、日本軍は、レエンジ・オパレーションズ・ビル近傍の陣地から軽臼砲の恐ろしい弾幕砲火を浴びせて来た。ために第一八四連隊の機関銃陣地は破壊され、日本軍は次いで現在のラグーン通りに沿ってアメリカ軍を押し戻した。

しかし通りを横切って他のアメリカの小隊の重機関銃が左転回し、これが進撃する日本軍をその露出した側面で捉え、その進撃を食い止めた。日本軍は夜もすがら執拗な砲火を浴びせ続け、両連隊ともに若干の犠牲者があった。その間カールソン島上の大砲が終夜島の残部をくまなく砲撃した。この戦闘第一夜に僅かでも休息をとれた者がいたとしてもそれは僅少であった。

一つの珍事を紹介しておく価値があろう。SSCビルの真向い、現在タクシー乗場がある所に大きな薪の山があり、日本軍はこの夜の少くとも一時期、この近辺を保持していた。そこをパトロールしていた二人のアメリカ兵が狙撃され、一人は事なきを得たものの他の一人は胸部に重傷を負った。二人ともども塹壕に転げ込み身を潜めた。日本兵は、米兵を調べどちらも死んでいると思い込み、その真上にあたるところに坐りこんでしまったので、二人とも身じろぎ一つできかねた。四時間経ち日の出が迫り、日本兵がその場を立ち去ろうと腰をあげたので、二人は九死に一生を得て、この話をしてくれたのである。



二月二日の進出

二月二日——前進益々難し

二日目の攻撃計画は両連隊の緊密な連携を必要とした。行動開始時刻は午前七時一五分と定められた。第三二連隊は大洋側を急進して島の北部に達し、第一八四連隊は礁側を進み、第三二連隊が現在湛水盆の東端となっているところを横切って走っている戦車壕を越えるのを援護することとなっていた。行動開始に先きだち、カールソン島からの準備砲火が一五分間浴びせられた。両連隊とも滑り出しは順調であった。

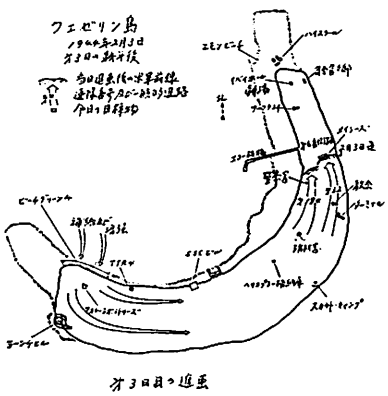
第一八四連隊は、現在ZARレシーバー及び浄水タンクのある所に前線を整えるところまで進んだ。ここで第一八四連隊は破壊された物の蔭に潜んでいた狙撃兵及び機関銃手に遭遇した。戦車とライフル銃火が協力してこの地域を鎮圧した。

第三二連隊は、島の大洋側に沿って北上中、至るところで強力な抵抗を受けた。その一つはキャンプハミルトンとカントリークラブが現在所在する地点であった。この地域は巧みに防備されていたので、戦車とライフル銃手が僅か二〇〇ヤード進むのに実に二時間を要した。第三二連隊に配属されていた戦車は、戦車壕を越えるのに長時間を費した。

遂に四台の戦車が戦車壕を迂回し大洋側の海岸に沿って進出した。その間歩兵と工兵の破壊班が頑強に抵抗する拠点を制圧していた。日本人は降伏を肯ぜず、捕虜は僅かに一名であった。

このときまでに、夜の防禦対峙線を組織する必要があった。コーレット少将は、日本軍の戦法を熟知していたので「昼夜とも常時反撃を警戒せよ。反撃は必至である。日本軍はその大義が絶望となるや、夜明け前に自殺的な反撃を加えて来る」との警告を発した。

しかしその夜は比較的静穏に過ぎた。午前三時二〇分頃までは死に物狂いの銃火と手りゅう弾がいくらか静寂を破ったが、その後は静まりかえった。この日のアメリカ側の犠牲者は戦死一一、戦傷二四一であった。陸戦、艦砲、地上砲火、七〇回の艦載機の出撃による日本側の戦死者は一、〇〇〇を超えるものと推測された。



第三日目の進出

二月三日——終末は指呼の間に

海兵隊は既にロイ、ナムル島を制圧しており、三日目の夜明けの時点では、クェゼリン島での勝利は、アメリカ軍の前線より僅か二、〇〇〇ヤード先にあった。しかしその前途には激しい戦闘が待ち受けていたのである。この日の最初の目標は、一、三〇〇ヤード先の第六番街路であった。この街路は島を横切りエコー桟橋まで延びていた。いつもながらの予備砲火が約一〇分間浴びせられた。まだ敵の手中に残る地域についての偵察写真のあるのは乏しく、予期以上の多くの掩蔽壕、トーチカ及び補強されたコンクリートの防空壕があった。これらの多くは第一八四連隊の戦区内にあった。

第三二連隊は、島の大洋側に沿って北上したが、最初の三五〇ヤードまでは殆んど抵抗を受けず、エアターミナルの近辺まで進撃した。しかし左手約一五〇ヤードにあった一つの大きなコンクリートのトーチカが前進を暫時阻止した。このトーチカは現在リチャードソン劇場の映写室のあたりにあった。破壊砲火と戦車からの七五ミリ砲が漸くにして敵を排除した。進撃は続き午前一一時四〇分までに、第三二連隊は第一八四連隊より前方に進出し、現在のバチラーズ・スイミング・プールのあたりを手中に収めた。

第一八四連隊は、最初の二二五ヤードまでは、大きな抵抗を受けずに進んだ。この地点から先には、この島のうちでも最も堅固に要塞化された陣地が望まれた。歩兵はいつものような戦車の援護を受けておらず、第一八四連隊はこの抵抗を迂回して避けようとした。日本軍はいち早くアメリカ軍のこの動きを察知し、壕から出て戦を挑んで来た。これは消防署の近くに現存している日本軍の防空壕の近辺でのことである。一方この地域でアメリカ軍は倉庫の破壊に力を注いだ。倉庫にあったのは日本軍が保有していた菓子、酒、ビールの残り全部だけであった。これらはすべて破壊された。

この時点で消防署近辺の地域は、破片、煙、砕片、倒れ裂かれたココやしの山であった。

戦闘は、やがて小さなバラバラの隊間の戦闘となり、更に悪いことには、第一八四連隊の砲火のいくつかは、戦場より遙か前方に進出していた第三二連隊の露出した側面に浴びせられていた。戦車が到着したものの、通信連絡に問題があり、大して役に立たなかった。徒歩の兵士と、その持てる限りの、それが何であろうと、破壊力あるもののみが、敵を撃退し、要塞を制圧する効を挙げた。

二月三日が終わり、前線はバチャラーズ・プールとパシフィック・ダイニング・ルームから島を横切り礁側に達する線となった。しかしこの前線内にも多くの狙撃兵がいた。二月三日にはアメリカ側は五四人が戦死し、二二五人が戦傷を負った。日本側は再び一、〇〇〇人を超える損失を受けた。この日を通じ、補給と増強がグリーンビーチ（現在コーラル・サンズ・ビーチのあるところ）に次々と陸揚げされ、アメリカの死傷者は礁湖内に停泊していた病院船「レリーフ」に収容された。

夜になって——混乱の悪夢

たこ壺に身を潜める疲れ切った将兵達にとって、また短気なコーレット少将にとっても、二月三日の夜の出来事は、正に、前途に横たわる少くともう一日の長い戦を試食するようなものであった。

二月三日の夜は、第一八四、第三二両連隊の将兵の多くにとって恐怖の夜であった。多くの地域において真に前線と呼ばれ得るものはなかった。日米両軍はいくつかの地点で近接して彼我入り乱れていた。その線といえば、恐らく、現在メイシーズとテンテンが位置する地点に始まり、退いて中央警察署に延びていた。

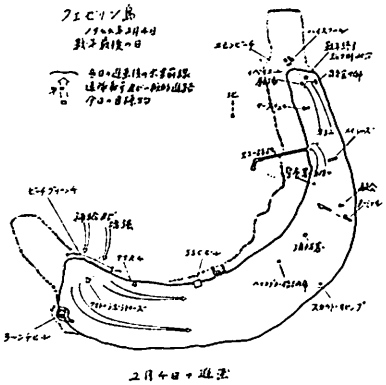
終夜、明滅する銃火、砲弾のさく裂、火災が戦場を照らし、人が動けばそのシルエットを描き出したが、両軍ともそれが敵か味方かの別さえつきかねた。背後にあたって、二つの大火炎が燃え上り、無気味な赤い光が全域を照らし出した。第六番街路とラグーン通りの交叉点（桟橋のつけ根の部分）にあった掩蔽壕内の日本軍の間からラッパが鳴り響くや、日本軍が喚声をあげて猛反撃を開始し、ラグーン通り沿いに現在の海軍少尉候補生宿舎の建物の長さ位進んで来た。この反撃及びその後のいくつかの反撃は午前五時三〇分まで起っては、その都度鎮圧された。コムニティセンターとパシフィック・バチャラーズ・クオーターズ近くでも何回となく浸透が試みられた。

二月四日——最後の一押し

二月四日の朝、疲れ切った第一八四連隊に与えられた任務は限られたもので、前線より二〇〇ヤード前進し、礁側の桟橋まで達するというに止まった。一方、島の大洋側の半ばを席巻した第三二連隊は、第六番街路に達し、第一八四連隊の戦区をつまみとり、そこで展開し、更に北上を続け島の北端に達することとなっていた。

カールソン島から一連の砲撃があったあと、部隊は発進したが、勢は頓に失われて行った。中枢の将校を失い、前夜中続いた狙撃兵の銃火に神経をすりへらされていて、攻撃精神は低下していた。前進は苦しみに満ち、遅々たるものであった。第三二連隊は予定どおり第六番街路に達したが、エコー桟橋には日本人の姿はなく、部隊はここで最後の前進のため展開した。

多くの障害物と猛烈な抵抗が進撃の速度をにぶらせた。四九四B兵舎のあるあたりに一つの大きな壕舎があり、まずこれを制圧しなければならず、さらにイベイホール劇場のある附近にはいくつかのトーチカがあり、一時間以上に亘って抵抗した。礁側の海岸沿い



の進撃は、より速やかで、一小隊は午後三時少し過ぎには一〇三号兵舎背後の防護壁に達した。同小隊は過ぎし数ブロックの激しい戦を忘れ、防護壁背後の海岸で小休止したが、間もなく小銃弾が頭上をうなりをあげて飛び始め、同隊は直ちに東に向け、さらに南に下り戦闘に加わった。

島の北端にある五つの砲座で最も激しい抵抗に遭った。これらは五フィートの円形の擁壁背後のコンクリートの土台に据えつけられた五インチ砲であった。土台の下はいずれも防空壕となっていた。五つのうちの一つは現在バンカー・ヒルが位置しているところにあり、他は概ね二二三B、一〇三、一〇五B及び一〇六A兵舎の位置するあたりにあった。日本軍の砲手、射手はここで不退転の決意をもって最後まで戦った。

日本軍の要塞攻撃の先頭に立っていたジョルズ一等兵が戦死したのは、戦闘の最終段階、バンカー・ヒルなどのこれらの陣地への攻撃の際であった。彼は、死後、最高功労十字勲章を授けられ、一九六七年には、わが軍の飛行場は、彼の名誉をたたえ、その名を冠したのであった。

戦闘は長引き午後遅くまでつづいた。大洋側においては進撃は難渋した。第三二連隊は司令官々邸近くの多くのトーチカと要塞とを次々と相手として戦って行った。その背後には、日本があるいは来るべき侵攻者を欺くため、数多くの木製銃が設置されていた。

この辺りにおいて、大洋沿いのアメリカ軍は、二二七号兵舎のあるあたりの破壊された探照灯の地点で熾烈な狙撃砲火を受けた。

この隊は一時間ばかり釘づけとなり、島の完全占領にはさらに丸一日を要するやに思われた。

しかし、弾薬補充のため後方に戻っていた戦車が、夕闇をついて、ラグーン通りとオーシャン通りを轟音をひびかせて北上して来た。部隊は一人また一人と誰の命令を待つまでもなく立ち上った。戦車が前進の先頭に立ち、探照灯近くの日本陣地に砲火を浴びせた。午後七時二〇分、夜陰が全島を包む頃、抵抗は遂に終りを告げ、世界最大の環礁は今やアメリカ軍の手中に帰した――しかし完全にではなく。

エビジェ島の戦い
遠島での不意討

クェゼリン環礁南部の主な戦闘は、二月四日夕刻には終ったが、他の場所においては、戦闘はなお継続しており、完全占領はまだまだ程遠いものであった。

二月三日エビジェ（バートン）島が攻撃された。カーロス島から二隻の輸送船に乗った第一七連隊は、礁湖を横切りエビジェ島に直航し、午前九時三〇分頃同島の南端に上陸した。

進攻前既に砲、爆撃がくまなく加えられてはいたが、同島(注四)はなお強固に要塞化されていた。同島の水上航空基地及び一〇〇を超える機械工場と建物は約四五〇人の守備隊がこれを守備しており、トーチカは無数で、塹壕が島中を縫っていた。

（注四）エビゼ島には第九五二航空隊（水上機）と第四施設隊の軍人軍属合計約八〇〇名が守備していた。

大規模にして複雑なクェゼリン島上陸に当っては犠牲者は皆無であったのに、皮肉なことに、エビジェ島上陸は抵抗を受けた。上陸部隊がエビジェ島の岸に近接するや、ビッグマスタード島及びエビジェ島の桟橋上の日本軍の射手が近寄る部隊に銃砲火を浴びせかけて来た。これらの銃砲が沈黙するまでにアメリカ兵四人が負傷した。

この時点から、戦車、空爆、艦砲射撃に援護された大隊が島を北上したが、至るところで強い抵抗を受け、全島を制圧するには二四時間以上を要した。同島でアメリカ兵七人が戦死し、八二人が負傷した。

クェゼリン島が翌日陥落した後も、環礁の南部にはまだ少くとも一二の小島が残っており、これらはいずれも各個に掃討し確保しなければならなかった。部隊は東礁脈では北はギリナム（ギレンイヤン）島まで、西礁脈ではイレジニ島まで一つ一つの島に上陸した。その二、三の島では思い掛けない抵抗に遭った。

西礁脈の島では、トンレ島からレガン（アンボ）島の間の島は殆んど無人であったが、そのさらに北にあたるエラー（エルップ）島には一〇〇人の武装した日本水兵（恐らくは礁湖内の日本艦船が空襲された際同島に逃れて来たものと思われる）が反撃を加えて来た。容易にこれを鎮圧したもののGI一人が戦死し、四人が負傷した。

東礁脈では、抵抗は更に激しかった。南ロイ（ロージ）島では四〇人のマーシャル人が進攻部隊を喜んで迎えたが、北ロイ島では二〇人ばかりの日本水兵と朝鮮人労務者が犠牲を払わずに鎮圧された。更に北のグジーグェ島では二〇〇人ばかりの日本人が掃討されたが、GI三人が戦死し、四人が負傷した。ニンジ島ではそこに居た一人の日本軍人のためアメリカ軍人一人が戦死し他の一人が負傷した。

水道の向う側、ビゲジ島の占拠はもっと手間がかかった。ここでは銃撃戦が数時間続き、数多くの壕舎、トーチカ、機関銃坐が、戦車と艦砲射撃の支援を受けて始めて鎮圧された。同島では九四人の日本人が数えられた。アメリカ側の損害は戦死一人、負傷二人であった。今日では興味のあることであるが、アメリカ軍はメイク（バスコム）島にも上陸を敢行したところ無人であった。ギリナム、オメレック（コ

ミレ）、エニウェタック（エニウエ）島はいずれも無人であったが、クアダック（クオーテップ）島には数人のマーシャル人が居た。

海兵隊による環礁北部の遠い島々への同様の上陸の完了をもって、クェゼリン環礁全部が今やアメリカ軍の手中に落ちたのである。

第七師団の全作戦における犠牲は、戦死一四二人、戦傷八四五人で、二人が作戦中行方不明となった。公的推測によれば日本側損害は、戦死四、九三八人である。二〇〇人が捕虜となったが、うち一二七人は朝鮮人労働者であった。

戦いは終りぬ

「一九四四年二月五日クェゼリン島にて――廃墟と化したコンクリートのトーチカから今もなお時折機銃が火を吹き、硝煙がくすぶるものの、第七師団の将兵は戦勝郵便の用紙を携え、あるいは木蔭に座り、あるいは地面に横になって、故郷への第一便を書いている。

多くの手紙は短く単純なものである。クェゼリン島に居るとは言えず、ここでの戦の始終をこと細かに書くこともできず、傷ついた戦友の名を記すこともできず、日付を書き込むことも、どこから来てどこに行くかも言えない。何についても多くを言えず、ただ言えることは、「私はまだ生きていて達者です。」だけである。しかしそれだけで十分である。

戦闘のため飛び散っていた数百の南洋の白い鳥が、今朝、舞い戻り、なお木であると思い込んでいるものの頂きで再び羽を休めている。役務班の将校が、二、三日中に始まる野外映画のスクリーンを吊す格好の場所を捜している。酒保を開く場所も明日には決まるであろう。

既に六台のブルトーザーが、日本軍が早々に放棄した半完成の飛行場の滑走路をならしている。

ここの二、三の敵の自転車は、乗るには小さすぎるし、ひん曲っている。しかしカンサス州カンサス市出身の沿岸警備隊砲手ロバート・フラー五級技術兵は、左ハンドルの砲弾の痕のあるトラックのエンジンを応急修理し、二、三分後には乗客を乗せて島中を走り回った。

熱いコーヒーとシチューが中隊の戦闘指令所で始めて供されている。ウインナーソーセージ、豆、肉、野菜の寄せ集め料理が、弾痕の穴の中のあちこちの火で調理されている。ベーコン・アンド・エッグも明日には供されるとの噂がある。しかし誰もあまりあてにはしていない。

今夜は眠れるのだ。しかし我々の多くは眠れまい。どうせ、戦闘後二四時間ではぐっすり眠ることなどできるものではない。」

軍週刊紙「ヤンク」掲載
マール・ミラー軍曹記
「クェゼリンでの戦闘を終えて」より引用

ロイ、ナムル島の戦い

「一九四四年一月末日のような晴れ渡った冬の日、クェゼリン環礁の北部の屈曲部は、これに近づいてみると、特有の美を備えていた。海と陸とが互にその美しさを高めあい、その色は想像を絶するほど生々としていた。まばゆい波頭が、光り輝く雲と濃いクリーム色の、波が寄せては砕ける、さんごの岸にふちどられた島の明るい緑の群葉を映し出していた。」

有名な海戦史家サムエル・エリオット・モリソンは、アメリカ第四海兵師団がロイ（ルオット）、ナムル（ニムル）島に進攻する一日前の両島の姿をこう描写した。

四八時間後には、濃い緑は姿を消してしまうであろう。戦争史上最も熾烈な砲爆撃が一木一草に至るまで取り払い、残るものといえば、二、三の建物や要塞の焼け焦れた残がいと、一握りのココやしの実をつけた断ち割かれた幹ぐらいのものであろう。きらめく白砂の海岸は砕片や破片で覆われてしまうであろう。荒廃のなか、ここで斃れるやも知れない四、〇〇〇人にのぼるアメリカ人、日本人のための墓所が清められるであろう。

戦闘が終った数時間後には、アメリカ中の新聞がニュースを掲げるであろう。戦前の日本の領土の一部分が戦闘により始めて占領され、アメリカ側の損害は軽微であると。中部太平洋において二年にわたって敗れ苦しみ、僅か二、三ヵ月前のタラワのレッド・ビーチにおける殺りくの恐怖になおもおののいている国にとって、ロイ、ナムル島からのニュースは測り知れない励ましであった。

さらに二、三週間前に訓練を終わり、カリフォルニヤのキャンプを引き払ったばかりの第四海兵師団自体も、日本の防御線の突出部突入に成功し、始めての戦火をくぐりぬけ姿を現わし

たときには血だらけではあったが、まぎれもなく勝利を収めていた。

ある退役軍人は、当時を追想して、「この海兵師団の始めての戦闘にしては上出来であった。われわれの犠牲は最少限であり、戦闘も僅か二、三日で終ったのであり、それは、テニアン、サイパン、硫黄島のような、もっと大きな、もっと手際のよい将来の作戦への大きな自信を植えつけるものであった。」と述べている。最終的な犠牲者のリストはかなり短いものであったが、いかなる戦史家も、ロイ、ナムル島の戦闘の重要性を低く見ることはないであろう。クェゼリン島の戦いと同じように、ここでの戦いは、単に統計が示すところよりも遙かに重要なものであった（「インセプター」一九七四年一、二月号）。

太平洋における戦いの勝利に向けた全作戦が、ロイ、ナムル島の海岸に懸っていた。白熱した議論の末、提督達は、日本本土への道として、海兵隊が先導する島嶼での戦いを選んだのであった。成功は、革命的な作戦、新設計の装備、熱帯での戦いの経験のない人々に懸っていた。マキンとタラワが実験場として選ばれたが、その結果は到底完全とはいえないものであった。

ここにロイ、ナムル島が登場する。それは生死を賭けた試験である。ギルバート諸島での過ちは正されようと期待された。ロイ、ナムル島においては、作戦立案者は、何一つとして偶然に賭けることはしなかった。侵攻は外科手術の正確さをもって遂行された。

マーシャル諸島に向けての長い航海にあった第四海兵師団は、第二海兵師団がタラワ島で味わった悪夢のような出来事をよく知ってはいたが、同時に、今回は未曽有の強力な艦隊が集結し、彼らと共にあることも知っていた。

一九四四年一月三一日、北部攻撃部隊に属する海兵は、誰もが、マーシャル諸島こそ日本への道の最初の一里塚であり、東京への長い道は、ロイ、ナムル島から真直ぐに延びていると感じとっていた。

初期の空襲

マーシャル諸島侵攻の「フリントロック」作戦について、ニミッツ大将は、自ら、主たる攻撃目標として、ロイ、ナムル島とクェゼリン島とを選んだ。彼は、ギルバートで勝利を収めたからには、時を移さず、マーシャル諸島の心臓部に奇襲をかけるべきであり、ヤルート、ミレ、ウォッゼ、マロエラップなどの他の強力な日本軍基地は無力化され、迂回し、孤立化されるべきであると考えた。この計画は、大将の幕僚たちが、いち早く指摘したように、危険を伴わないわけではなかった。しかしそれは、ニミッツが望んでいたとおり、日本軍の虚をついたのである。

大きな航空基地と潜水艦による補給基地のあったロイ、ナムル島には、三、五〇〇人の日本人が居た(注五)。タラワの占領後、ロイ、ナムル島に対する始めての大空襲は、一九四三年一二月四日に行なわれた。それは、パウナル少将の率いる空母六隻が北東端より一一五マイル離れた地点から延べ二五〇機の攻撃を加えたのである。日本の爆撃機三機、戦闘機一六機が地上で破壊され、ほかに、爆撃機一〇機、戦闘機一八機が空中戦で撃墜された。しかし多くの敵機は三つの滑走路のあたりに巧みにカムフラージされ損壊を免れた。

（注五）両島を守備する日本海軍はクェゼリンの第六十一警備隊の分遣隊約四〇〇名が、戦闘兵力で、あとは第二十四航空戦隊の整備員など一、五〇〇名、第四施設隊の派遣隊の軍属約八〇〇名その他合計二、九二〇名だけであった。そしてその戦闘員は約一ケ中隊に過ぎなかった。これはマーシャル群島中の中心基地で第二線と言うことから、第一線のミレ、ウォッゼ、ヤルート、マロエラップ島とは比較にならぬ兵力であった。

ロイ、ナムル島近くの環礁では、軽巡洋艦「五十鈴」が沈没は免れたものの大破し、当時現存した最大の輸送船「朝風丸」は大爆発を起して瞬時にして沈没した。恐らくは大量の弾薬類を積んでいたものと思われる。パウナル少将の飛行機は、この攻撃の際同時に、五〇マイル南のクェゼリン島とエビジェ島の日本の船積、基地施設に多大の損害を与えた。この攻撃でアメリカ側は五機を失ったのみであった。

しかし、ロイ、ナムル島は無力化したというには程遠く、同日午後、ロイ島、マロエラップ島を発進した日本機はパウナルの機動部隊に必死の反撃を加えて来たが、成果を挙げるには至らなかった。ついでその夜、明るい月夜の海に華々しい空襲をかけて来た。日本機多数が撃墜されたが、その前に空母レキシントンもいくらかの損害を蒙った。

一二月中旬、アメリカの空母艦隊が「フリントロック」作戦に備え編成替えのためハワイに引き揚げると、代ってタラワを陸上基地とするB24がロイ、ナムル島その他のマーシャル諸島の日本軍基地に組織的爆撃を加え始めた。しかしDデーの僅か四日前の一月二七日になっても、ロイ島にはなお約一〇〇機の戦闘可能の飛行機が残っていたのである。

空を制す

二九日、空母艦隊が帰来し、再び攻撃に加った。その日の朝早く、海軍のヘリカットとアベンガー雷撃機がロイ、ナムル島を空襲した。午前八時までに、組織だった機銃掃射と激烈な一連の空中戦の結果、環礁内の日本機は

一機残らず破壊された。ロイ、ナムル島の上空では、ヘリカット四機とアベンガー一機を失ったに止まった。かくて、かつてはマーシャル諸島における日本空軍力の誇であったこれら両島は、今や空襲と近距離艦砲射撃の前に身をさらけ出して横たわっていた。その夜戦艦数隻が海岸線を砲撃するため至近距離に移動した。次の日、空母艦載機が日本軍を重ねて空から猛爆した。

砲爆撃始まる

多くの点において、ロイ、ナムル島上陸を通ずる作戦は、これと併行して行なわれた第七師団によるクェゼリン島侵攻におけると同じであった。

作戦計画の基本は、主たる目標物に対し、継続的な艦砲射撃と呼応して容赦のない空からの機銃掃射と爆撃を加えることにあった。これに加えて、ロイ、ナムル島両側の島々をまず占領し、もって礁内への深い進入路を確保し、次いで近距離からの支援砲火を浴びせる陸上砲撃基地とするという段取りであった。クェゼリン島におけると同じく、ロイ、ナムル島への最後の攻撃は、日本軍が攻撃を予期し、防御施設もより強力であった大洋側ではなく礁側からであった。

南部環礁におけると同じように、日本軍は水道を扼する島々には本格的に力を注いでいなかった。

しかし、ロイ、ナムル島の防備が手薄であったわけではない。数多くの海岸防備の機銃と重、中高射砲があり、機関銃座、機銃掩壕、戦車壕、掩蔽壕および五二のトーチカが島々を縫っていた。

攻撃戦力はいずれの観点からしても、すさまじいものであった。約三〇〇の艦船、数百の飛行機、五四、〇〇〇人の将兵がクェゼリン環礁の攻撃に加わった。ロイ、ナムル島においては、第四海兵師団は、ハリー・シュミット少将に率いられ、北部攻撃部隊の全般的指揮は、リチャード・エル・コノリー海軍少将がとった。

Dデーの一月三一日の二日前、コノリー少将の機動部隊は、これを支援する一群の空母から発進した艦載機に呼応して、ロイ、ナムル島の一ヤード平方ごとに砲爆弾を浴せ始めた。戦艦「テネシー」「マリーランド」「コロラド」は巡洋艦五隻、駆逐艦一九隻とともに一刻の猶予も与えず島々を砲撃した。ある地点では日本の射手が執拗極まりなく砲火を浴びせ返えして来たとき、コノリー少将は、この敵の砲火を沈黙させるため、戦艦「マリーランド」に対し水平射程距離まで移動するよう命じた程であった。

この行動のため、彼は「斬り込み」コノリーとの有名なニックネームとともに、戦いの間ロイ、ナムル島その他の島々の岸に取りついた海兵隊員の不変の敬愛をかち得たのであった。

Dデー――海兵隊員重要な島々を占領

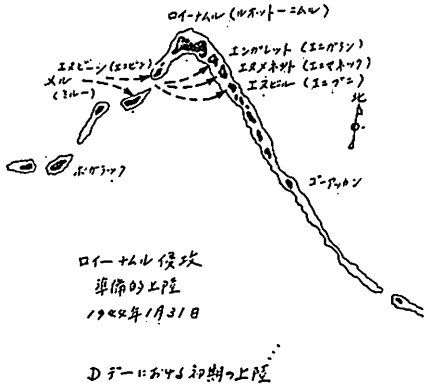
一月三一日早朝、第七師団の部隊が環礁南部のガエ島に上陸していた頃、第四海兵師団は、ロイ、ナムル島を取り巻く五つの島への同様の攻撃を準備していた。

最初の目標は、ロイ島の南西にあるエヌビーン島とメル島であった。海が荒れ、連絡通信もうまくゆかなかったため、予定より大幅に遅れはしたものの、第二五海兵連隊と偵察海兵中隊は、これらの島々を計画どおり速やかに制圧した。海兵隊はエヌビーン島に予定より一時間遅れの午前九時五二分に上陸し、一三人の日本人を斃し、三人を捕虜として、午前一〇時一五分までに同島を制圧した。

これより大きいメル島の占領は、上陸用装軌車輛が大洋側からの上陸を敢行しようとしたが、強風と高波に遮ぎられて更に遅延した。一隻の上陸用装軌車輛が礁脈に乗り上げ転覆し、海兵数人が溺れるや、偵察中隊は命令を無視して礁内に入り、午前九時五五分、島の南東側に上陸した。午前一一時四五分までに同島は制圧された。日本人一七人が戦死し、二人が捕虜となった。二、三時間の内に、海兵砲兵隊は七五ミリ携帯曲射砲と一〇五ミリ曲射砲を陸揚げし、ロイ、ナムル島への空、海からの爆撃を支援した。

エヌビーン、メル両島の占領をまって、水道が掃海され、艦船と上陸部隊が、次の一連の攻撃――ナムル島の南東に接するエヌビール、エヌメネット、エンガレット三島に対する攻撃――のため礁内になだれ込んだ。

いくつかの混乱と大幅の遅れはあったものの、海兵隊は午後三時頃エヌメネット、エヌビール両島に取りつき、これを速やかに席巻し、日本人三四人を斃したが、一方数人の犠牲者が出た。午後四時三〇分までには両島を制圧した。



最後の準備を終えて

これら両島にも大砲を陸揚げすることとなっていた。しかし礁内は大荒れに荒れ、ここでも遅延を余儀なくされた。これらの上陸の間水陸両用車が寄せ波で転覆したとき海兵四人が失われ

た。砲兵隊は、主たる上陸の際支援砲火を浴びせるため大砲の準備を整えるため夕方より夜を徹して働いた。

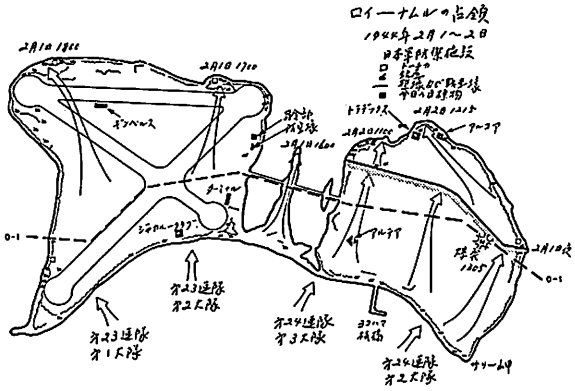
Dデーの最後の準備上陸は、ナムル島の東南に隣接するエンガレット島で行なわれた。勇敢な海軍大尉が自らエヌメネットから同島の間を渡渉し、水深と礁脈の状態を偵察した後、海兵隊がエンガレット島に上陸し、午後七時一五分、同島の大部分を制圧した。敵六人を斃したが、残りは明らかに礁脈伝いにナムル島に退避した。

Dデーの夜の帳が降りる頃、海兵隊は、その日の目標である五つの島全部を占領していた。日本側の損害は、戦死一三五人。一方海兵隊は作戦従事中二六人が戦死または行方不明（多くは舟艇事故によるもの）となり、四〇人が負傷した。砲兵四個大隊がロイ、ナムル島上陸支援のため砲床をすえつけた。

この間コノリー少将の戦艦、巡洋艦、駆逐艦が終日ロイ、ナムル島を砲撃した。クェゼリン島におけると同じく掃海隊が上陸予定海岸の五〇ヤード以内の礁脈を調べたが、機雷その他の障害物はなかった。駆逐艦が終夜、断続的にロイ、ナムル島に砲火を浴びせ続ける間、第二三、第二四連隊の海兵たちは、H時への秒読みが続くなかで、できる限りの休息をとった。

攻撃を控え、さらに砲爆撃

Dプラス・ワンの朝が明けそめるや、海兵隊の大砲、艦砲、艦載機は、ロイ、ナムル島に対する最大規模の砲爆撃を開始した。午前六時四五分、前日占領した近くの島々に展開した砲兵四個大隊が上陸予定の海岸に砲撃を開始した。午前六時五〇分、戦艦「マリーランド」巡洋艦「ビロクシー」「インディアナポリス」駆逐艦「マスティン」「ラッセル」がロイ島に砲門を開き、ややあって、戦艦「テネッシー」「コロラド」巡洋艦「モリス」「アンダーソン」がナムル島に猛砲撃を開始した。空母「イントレピット」「キャボット」を発進した艦載機の波が何トンもの爆弾を投下し、戦闘機編隊が頭上僅か二〇〇ヤードないし三〇〇ヤードの低空から朝のうちずっと両島の上陸予定海岸を掃射した。海兵隊の第一陣が正午近くなって海岸に取りついた時には既に約六、〇〇〇トンの爆弾、砲弾が長方形の形をしたロイ、ナムル島を粉砕していた。その総量は、僅か二、三カ月前のタラワ侵攻に先き立って投下された砲、爆弾のほぼ三倍に達していた。



砲爆撃の効果に疑う余地はなかった。ロイ島においては、海兵隊の誰一人海岸に第一歩を印さないうちに、守備隊の六三％は既に戦死していたものと後刻推測された。

砲爆撃はほぼ完全に整然と行なわれたが、上陸自体はそうはいかなかった。混乱の主な原因は、荒波、強風、貧弱な連絡通信、経験の乏しいボートの乗組員にあった。約五〇〇の上陸用舟艇が出撃線と攻撃波の中のあるべき位置を求め礁湖内を右往左往し交叉しあったりして、何回となく出撃が遅れた。しかし遂に第一波が駆逐艦「フェルプル」からの合図で発進し、海兵隊の第一陣が午前一一時三〇分ロイ島の岸に到達した。上陸は、第七師団がクェゼリン島上陸で演じた完全さこそ明らかに欠いていたが、積極果敢な海兵隊は、一たび岸に取りつくや、遅れた時間を早々に取り戻して行った。

海兵隊ロイ島の岸に取りつく

第二三連隊がまず岸に取りついた。第一大隊を左に、第二大隊を右にして、午前一一時三三分少し過ぎ、ロイ島の海岸を通過し始めた。抵抗があったとしても、ごく僅かであった。ある従軍記者が報じたように、準備的砲爆撃は極めて効果的であったので、海兵たちは立ったまま進攻できた。

数群の戦車が先頭に立ち、両大隊は内陸に向け急進撃した。いささかの抵抗ともいえるものは、滑走路に沿った排水溝と破壊物の砕片の山に身を潜めた気を失なわんばかりの小人数の守備隊からであった。上陸後一時間足らずの午前一二時一七分、第二三連隊は、最初の目標である、礁岸から二〇〇ヤードないし三〇〇ヤードの内陸を横切って走る0—1ライン（図面参照）に達していた。

このライン自体も、その辺りに散在していた日本機の残がいや破片の中で見分けがつき難かったので、戦車が、次いで歩兵がそのラインを越えて進撃し、その間少数の孤立した日本人に遭遇したに止まった。どの地点においても、日本軍は攻撃を喰い止める組織的抵抗をすることはできなかった。

島を横切り進撃急

余りに急速に進撃したので、0—1ラインを越えた海兵隊は、そのときなおも島の大洋側に降り注いでいた艦砲の危険にさらされた。そこで前進は中

止され、前線を一時後方に下げ隊形を整えた。午後四時、第二三連隊は再び発進し、二時間後にその先頭の小部隊は苦もなく島の北岸に達した。午後を通じての日本軍の狙撃のため、いくらかの混乱と若干の犠牲を生じたものの、ロイ島は午後六時までに制圧され、一時間余り経って、その占領が宣せられた。勝利は六時間にして達せられたが、海兵隊が実際に攻撃に要したのは、そのうちの三時間に過ぎなかったのである。

ロイ島はタラワはもとより、第七師団が四日にわたる戦闘の初日に漸く島内に進攻を開始していた五〇マイル南のクェゼリン島とも事情を全く異にしていた。ロイ島の海兵隊の犠牲は戦死三人、戦傷一一人という驚くべき少数であった。事実それはロイ島自体の攻撃の準備としてなされたこれを取り巻く島々の占領に払った犠牲よりも少なかったのである。

ロイ島の北岸を掃討中、第二三連隊の海兵は、自ら命を断った日本軍人で埋まった塹壕を見付けた。彼等は小銃の銃口を自らのあごに当て、足指で引き金を引いたのであった。今にして思えば、日本軍の絶望的状態が思いやられるのである。戦車はなく、空や海からの支援もなく、増強を受ける見込みもなくして、ただ島を最後まで死守せよとの命令を受け、戦いの望なきこと明らかとなるや、多くの者が死を選んだのであった。

島の北岸に沿って群をなしていた多くの塹壕、トーチカ、掩蔽壕も等しく心胆を寒からしめるものであった。それらのうちには、四フィートの厚さの擁壁をもったドイツ型の大きな円形の防塞もいくつかあった。鉄製の引戸が砲口を蔽い、もし海兵隊が大洋側からの上陸を選んでいたとしたならば、致命的な砲撃はいかばかりであったかは自ら明らかであった。

ナムル島――遥かに割り難いココやしの実
大爆発に二四連隊一頓座

午前一一時四五分から正午の間に、第二四連隊が岸に取りついた隣のナムル島では進撃は遥かに難渋した。ここでは日本軍は、より強力な守備態勢を布いており、砲爆撃を免れた多くの草木が確固たる決意を固めた守備隊のための好個の潜伏場所となっていた。さらにロイ島に対する砲爆撃が始ったとき多くの日本人が同島の開けひろげの地域からナムル島に流れ込んでいた。またエンガレット島が前日占領されたとき同島から退避して来た日本人がいたことも疑のないところである。

ナムル島の東側緑二海岸では、第二大隊は上陸時に軽微な小銃の射撃を受けたが、内陸に向け二〇〇ヤード急進撃した。尤も一つの強力な抵抗がナムル島の東南端サリー岬であったが、孤立化され後にせん滅された。左側緑一海岸では、第三大隊がその日の全環礁のうち最も堅固な海岸にとりつくという不幸に見舞われた。同大隊の責任範囲は、ロイ島の東南端からロイ、ナムル両島の間の砂嘴を横切り右側は横浜桟橋まで延びていた。これらの海岸に点在するトーチカは砲爆の被害を受けておらず、海兵の多くが上陸用舟艇より一歩踏み出すや射撃された。攻撃部隊はこれらのトーチカと戦うために進撃を止める策をとらず、これを迂回し、その処理は後続の破壊班に委ねた。午後二時、大隊は小休止し態勢を整え、戦車と無軌道式軍用トラックの到着を待った。

右側第二大隊も前進し、0―1ラインの少し手前の地点まで達していた。この時、全戦闘のうちで最も忘れ難い大事件が発生した。

午後一時五分、水雷の弾頭を貯蔵していた一つの大きなトーチカが、なんの前触れもなしに爆発した。轟音が耳をつんざき、島が激しく揺れ、目鼻を刺す黒煙が一、〇〇〇フィートの上空に達した。爆発力はすさまじく、たまたま上空を飛行中の海兵隊の偵察士は、爆風で乗機が一、〇〇〇フィートも押し上げられたのが判った。彼は「これはたまげた。全島残らず吹っとんだようだ」と伝えた。それはこの世で二度と見られない最も破壊的なものとして第四海兵師団の人々の脳裏を離れない。このため大隊の進撃は一頓座し、ナムル島攻撃は一時的な混乱に陥った。

さらに悪いことに、海兵二〇人以上の生命が奪われ、三、四〇人が負傷したが、これらは全ナムル島作戦中の犠牲者の半ばを超えるものである。爆風と震動による即死を免れた海兵たちは、何秒か経って、中空に舞い上ったコンクリートの大塊、ひん曲った金属や木製の角材、水雷の弾頭が舞い下りて来たとき、地面に叩きつけられた。

この爆発は、当初日本軍が引き起したものと信ぜられていたが、その後の調査で実はそうでないことが判った。明らかに、海兵隊の破壊班がそのトーチカを日本軍の砲座と見間違え、その中に一六ポンドの容器に入った爆薬を投げ込んだのであった。その跡には、建物は影形もなく、水を湛えた大きな噴火口が残ったが、そのおよその姿は今もなお見ることができる。

バンザイ攻撃、そして終局的勝利

この間に日本軍は感覚を失なわせるような砲爆撃の影響から再び立ち上がり、海兵隊の攻撃の思わざる一頓座の虚につけ込んだ。左にある第三大隊が午後四時三〇分、再び発進するや、直ちに日本軍のトーチカと機銃砲座からの死物狂いの抵抗に遭遇した。これらは次々と制圧されたが、それは、しば

しば海兵隊員の個人的な勇猛さによって始めて果たしえたものであった。右にあっては、第二大隊が三〇分後の午後五時発進したが、これも破砕物、半壊の建物、そして執ような日本軍守備兵に阻まれ、前進は遅々たるものであった。午後七時三〇分、夜の対峙線をひかなければならなくなったとき、第二大隊は僅か三〇〇ヤード前進したに止まったが、左の第三大隊は北岸から二〇〇ヤードないし三〇〇ヤード以内にまで進出していた。

ナムル島の生き残った日本軍は、終夜、スコールと夜蔭に乗じて、「バンザイ」攻撃を繰り返えして来た。左にある第三大隊がその攻撃の矢面に立ち、攻撃は数時間続き、ある地点ではI・L両中隊が退却し編成替えを余儀なくされた。これらの攻撃の間、白兵戦が随所に展開され、攻撃終了まで両軍ともに多数の戦死者が出た。

翌朝になると、なお活動していたのは離散した日本軍の小員数の隊のみであった。午前九時から一〇時までの間に、戦車と無軌道式軍用トラックが前進し来り、最後まで抵抗するトーチカと防塞とを破壊し、上陸後二四時間余り経った午前一二時一五分ナムル島の占領が宣せられた。

星条旗がナムル島に飜える直前、最後の日本軍陣地への攻撃に自ら部下の指揮をとっていたアキュラ・ジェイ・ダイス少佐が機関銃の弾丸を受け戦死した。彼は全作戦を通じて戦死した最高位の将校であった。彼の勇猛を讃え死後名誉勲章が授けられた（この日の戦闘で第四海兵師団に四つの名誉勲章が授けられたが、二四時間の戦闘としては恐らくレコードであろう）。一九六七年海軍はダイス少佐の名誉を再び讃え、ロイ、ナムル島飛行場に彼の名を冠したのであった。

余　波

戦うこと二四時間余、海兵隊は、ロイ、ナムル全島を手中に収めた。海兵隊の戦死者は一九四、負傷者は五四五を数えた。日本側の損害は戦死三、四七二人、捕虜九一人、うち四〇人が朝鮮人であった。

ロイ、ナムル島の戦いが終った後、哨戒兵が廃墟をしらみつぶしに捜索している間、他の海兵部隊が環礁の北部の離島に組織的上陸を開始した。これらの島々には、環礁北部のすべての島々、即ち、西礁脈では南はイレジニ島近くまで、東礁脈では南はメイク（バスコム）島近くまでに及ぶ島々が含まれていた。日本人は殆んどおらず、多くの場合、親切なマーシャル島民がおり海兵隊を歓迎した。ある海兵隊員は、島々の多くはこれを占領するより、その島の名を発音する方がずっと難しかったことを覚えている。

この頃、第七師団は漸くにしてクェゼリン島占領を半ば果していたにすぎなかった。ロイ、ナムル島での戦闘が終った当時、第三二、第一八四両連隊は、現在ヘリコプター格納庫とZARコンプレックスが位置しているあたりの地域まで進出するに止まっていた。

クェゼリン島攻略計画もロイ、ナムル島のそれと同じく急速な進撃と一両日中の勝利を予定していた。しかしクェゼリン島での勝利には、ほぼ四日を要した。このため両者はこれまで、しばしば比較されて来たが、とどのつまり人を誤らしめるものである。海兵隊は原則として陸軍部隊より勇敢に攻撃を押し進めたうえ、迂回した抵抗拠点はこれを後刻掃討する。これに対し陸軍部隊の攻撃のやり方は進撃前に予め猛烈な砲爆撃を加え、徹底的に組織だった前進をし、その間すべての抵抗を排除して行くというにある。一言でいえば、ロイ、ナムル島におけると、クェゼリン島におけるとの相違は本質的には流儀の問題であった。さらにクェゼリン島は幅の狭いブーメランの形をしていて日本軍にとり容易に懐の深い防禦態勢を布き得たのに対し、ロイ、ナムル島は多角形をしていて攻撃をかける側としては機動力を発揮する余地が遙かに多かったのである。

それはともかく、日本軍は勝利とはいえないがロイ島に最後のお礼参りにやって来た。戦闘終了一〇日後の二月一二日設営隊が砕片や残がいの除去、廃墟の清掃、飛行場の復旧をしていたとき、ポナペを発進した高空飛行の日本爆撃機編隊が、奇襲を加えて来た。同地のアメリカ軍守備隊に焼夷弾を投下し、その一つは偶然にも弾薬の臨時集積所に命中した。数秒後、島は爆発する地獄と化した。ある従軍記者は「爆発する弾薬と高性能爆薬からの厚い火の海」と形容した。空襲は僅か五分間続いたに止まったが、弾薬集積所からの衝撃は遙かに長く続いた。

犠牲者は多数にのぼり、損害は少くとも一〇〇万ドルに達した。最も悪いことに、アメリカの空母艦隊は他の作戦のため既にロイ島を引き揚げていたので、日本機を追跡する飛行機は一機すら手許になかった。

しかし設営隊は島を清掃し滑走路を修復するという気味の悪い作業を再開した。日ならずして、かつてはマーシャル諸島の日本軍最大の航空基地であったロイ、ナムル島はアメリカ軍のため同様の役割を果たし始めた。そこでの勝利のあと、第四海兵師団は既に東京への長い旅の第一歩を踏み出し、アメリカ軍はエニウェタック、カロリン諸島、マリアナ諸島、硫黄島への道を着々と歩を進めていたのである。マーシャル諸島での輝かしい勝利をかちとって、中部太平洋を貫く進攻は旭日と相見えるため西に向け着実に進んで行ったのである。

（注記—木ノ下　甫）

訳出を了えて

三ツ木　正　次

この戦記は、オブライエン氏がアメリカ側の資料を駆使して執筆されたもので、当初一九七四年ベル・テレフォン・ラボラトリーズの社内新聞の特集号として出版されたが、一九七八年六月クェゼリン郷友会が同社の許可を得て六四ページの小冊子にまとめた。それには米軍当局の撮った生々しい戦闘の写真を始め、戦跡、現状の写真、従軍将兵からの編集者への手紙なども数多く収められている。

本文にも書かれているように、クェゼリン島は幅の狭いブーメラン（木片の中央を少し曲げて作った豪州土人の用いる飛道具）の形をしていて、その曲った外側の岸には太平洋の波頭が砕け、内側には常時は鏡のような礁湖が横わっている。その礁湖側に、あの熾烈な戦火を免れたココやしがたった一本今も残っている。「孤独のココやし」と呼ばれているが、三年前の墓参の折り、これを仰ぎ、ふと藤村の詩を思い浮べ「あゝココやし何をか語り、岸の波何をか答う。」と感慨切なるものがあった。

「近いようで遠く、遠いようで近い所」とはクェゼリン島で散った兄が同地への赴任を前に洩らした言葉であるが、現地墓参を果たした今、新らしい意味をも帯びて甦って来る。戦前、日本の委任統治地域の一部として身近に感じていた所でありながら、今日ジェット機でも、丸半日もかかる遠い所、しかし現地の方々の生き方に触れるとき何人も昔日を身近に感じることであろう。

この近いような遠いようなマーシャル諸島を始め南洋群島の四つの地域は、既にそれぞれ憲法を制定し政府を樹立したものの、内外の諸情勢から、今なお信託統治下にあるただ一つの地域であり、昨今の緊張した国際情勢のもと、その岸に寄せる太平洋の波は、なお高い。この拙稿を綴りつつも「孤独のココやし」に見守られて、クェゼリン島の墓地に、語るすべなく眠る八千柱に思を馳せ断腸の念にかられるとともに、太平洋の波静まれと祈ること切なるものがある。

（昭和五十六年七月十四日）

昭和五十六年八月十五日発行
環礁（別冊）クェゼリンとロイ、ナムル戦記
（非売品）
（発行所）
東京都世田谷区野沢三―十一―三
マーシャル方面遺族会
電話〇三―四二四―四三〇〇
1981©
（印刷所）
東京都中央区日本橋茅場町三―九
保好舎印刷株式会社
電話〇三―六六六―〇六六〇（代）